

『急進主義者フィーリクス・ホルト』にみる ダーウィニズムの言説

福永 信哲

The present paper focuses attention on an influence of Darwinism as seen in the discourse of *Felix Holt, the Radical*. True George Eliot's early and middle-period novels show signs of a vision of Natural History with its emphasis on scientific observation of the natural world. But as the impact of *The Origin of Species* (1859) sent a shock wave among the intellectual circle across Europe, she became growingly aware of its far-reaching implications. Inevitably Eliot's novelistic discourse has become permeated with the evolutionary outlook and terminology. *Felix Holt* marks a turning point in the sense that it is structurally conceived by the method of experimental science, and is clothed in its phraseology. We see how the writer's moral and religious vision finds itself subtly reconciled with scientific world view.

Keywords : 進化, 有機的生命, ネメシス, 罪, 仮説・検証

序

Felix Holt, the Radical (1866) (以下、『フィーリクス』と略称) は、ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) の小説の中では後期に位置づけられる最初の作品である。1832年、第一次選挙法改正をめぐって新旧秩序がせめぎあうイングランドの時代状況を背景に、主要人物の人生が織物のように織りあわされている。一つの歴史的時代の断面を切り取る描写の中に人物群像の内密な暮らしが位置づけられている。政治的・社会的な背景の公的な領域と人物の私的な生活領域は有機的につながっている。作家の有機的生命観 (organic vision) は、*Adam Bede* (1859) と *The Mill on the Floss* (1860) の初期小説から作品テキストの構造と文体のここかしこに反映している。ところが後期になると、ナチュラル・ヒストリーの自然観察のまなざしの中に実験科学の仮説検証の方法が浸透してきて、これがプロット展開の原動力となっている。ビア (Beer) によると、プロットが仮説の性質を帯びて、人物の言動の自律的な動きが仮説を検証する意味あいを含

めている。こうしてエリオットの小説プロットは、全知の作家に代わって、権威ある語りの構造を模索する手段となったという (149)。¹

エリオットと、事実上の伴侶ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes, 1817-78) は、生物学、生理学・心理学の共同研究を1850年代後半から継続していた。その成果は、性格描写のテキストに、文学的リアリズムの観察力に加えて、自然科学的な洞察力を添えることになった。とりわけ、行為の動機を探求する作家のまなざしにより、その文体にイメージ言語の多義的な曖昧さが加わった。1860年代半ば以降はテキストの隅々に宗教・道徳と科学の対話が浸透し、これに神話的主題が加わり、読者を解釈という行為に招き入れ、対話を促す度合いが強まった。エリオットの後期小説を読む人は、命の営みの背後に広がる「沈黙の向こう側」(*Middlemarch*, 217) (以下、*MM*と略称) の闇の領域を手探りする作家の営みを共有しないではいられなくなる。ひたすら文脈に聞き耳を立て、言葉の闇の中で真意を聞き取ろうと感覚を研ぎ澄ますことを求められる。

多義性の豊かな文体と向き合い、蠟燭を灯して闇を手探りしつつ、微妙な意味の綾を探りつつゆくことを誘われる。それ故、辛抱の要るテキストとの対話をやり遂げた者には、自然と人生に内在する法則が明らかになる。読むことは人生の闇を手探りし、意味を発見することに他ならない。² 本論では、『フィーリクス』にみる宗教・道徳と進化論の対話を、テキストを基に裏づけてゆく。

I. トランサム夫人：生きている過去

『フィーリクス』にはトランサム夫人の過去の罪がもたらす因果応報の物語と、若きエスタ・ライアンが二人の男性（夫人の息子ハロルド・トランサムとフィーリクス・ホルト）の間で結婚相手の選択に逡巡する物語の二つのテーマがあざなわれている。二つの物語は絡み合い、相照らしあいながら、有機的生命コミュニティの相互依存を浮き彫りにしている。作品テキストを特徴づける複雑微妙な意味の奥行は、一つにはトランサム夫人（と館の弁護士ジャーミン）の犯した罪が読者には伏せられ、物語の展開とともに明らかになってくる語りの構造に由来している。世間や神の眼を偽り、罪を押し隠す夫人の業苦は、それ自体で因果応報の道理を証している。過去は、行為者が背を向けようとしても生きている。人間関係の網の目のからくりが働いて、真実は明るみに出され、応分の償いが待ち構えている。ここに夫人の人生が象徴する道徳的因果律（Nemesis）の精髓がある。

以下は、序章末に見られる黙示録を偲ばせる一節である。

For there is seldom any wrong-doing which does not carry along with it some downfall of blindly-climbing hopes, some hard entail of suffering, some quickly-satiated desire that survives, with the life in death of old paralytic vice, to see itself cursed by its woeful progeny — some tragic mark of kinship in the one brief life to the far-stretching life that went before, and to the life that is to come after, such as has raised the pity and terror of men ever since they began to discern between will and destiny. But these things are often unknown to the world; for there is much pain that is quite noiseless; and vibrations that make human agonies are often a mere whisper in the roar of hurrying existence. There are glances of

hatred that stab and raise no cry of murder; robberies that leave man or woman forever beggared of peace and joy, yet kept secret by the sufferer— committed to no sound except that of low moans in the night, seen in no writing except that made on the face by the slow months of suppressed anguish and early morning tears. Many an inherited sorrow that has marred a life has been breathed into no human ear.

The poets have told us of a dolorous enchanted forest in the underworld. The thorn-bushes there, and the thick-barked stems, have human histories hidden in them; the power of unuttered cries dwells in the passionless-seeming branches, and the red warm blood is darkly feeding the quivering nerves of a sleepless memory that watches through all dreams. These things are a parable. (11)³

この一節では、トランサム夫人の人間的真実が、超越者のすべてを見通す眼で透視されている。彼女は自らの道徳問題の本質を見ようとせず、15年ぶりに植民地から帰ってきた息子ハロルドに希望を託している。ところが息子には息子の人生があり、疲弊したエステートの再建を志そうとする。彼には彼なりの改革の夢があり、貴族の申し子としての自分が急進派の政治家を志すのも、時代情勢を読んだしたたかな計算があつてのことだった。“some tragic mark of kinship”の暗示する道理は、彼の実務家としての辣腕と自信家の気質が父親似であることを、母親が心の痛みとともに気づいたことにある（ハロルドの実の父親がエステート専属弁護士ジャーミン氏であることは、結末近くで本人の口から語られる）。父子の血の絆が皮肉な結果をもたらしたのである。やり手の息子は、エステート管理の実権を握ろうとして、ジャーミン（この時点では、息子は相手が実の父親たる事実には思いも及ばない）の旧悪を暴き、母親を無力な老母の地位に祭りあげようとする。ハロルドのエステート改革に賭ける行動への情熱が、実の両親に過去の罪業と向き合うことを迫ったのである。これが血の因縁の皮肉である。人の思いと運命は違うという道理に夫人が目覚めた（discern between will and destiny）時、彼女の心には鋭い胸の痛みが走ったのである。帰郷した息子に賭けた夢はこうして打ち砕かれ、若き日の情事の結末が思いもかけない形で露頭を顕す皮肉を、彼

女は身に染みて悟ったのである。

テキストの語彙から窺えることは、自然界の生命進化プロセスの文脈に人間の心身の営みが位置づけられていることである。“blindly-climbing”, “entail of suffering”, “desire that survives”, “paralytic vice”, “progeny”, “kinship” 生物学、医学の眼で捉えたこれらの言葉は、自然界で生命が生き残るための困難と神秘的知恵と因果律を偲ばせる。“the one brief life to the far-stretching life that went before, and to the life that is to come after” これは、時の悠久の流れを想起させる。人の親から子への生物的、文化的継承にとどまらず、地球的時間の流れの中にある命の適応プロセスを暗示する。“there is much pain that is quite noiseless; vibrations that make human agonies are often a mere whisper in the roar of hurrying existence.” ここには、トランサム夫人の過去の罪が胸中にわだかまり、不安と恐れが心の安息を奪ってゆく内的風景が示唆されている。同時に、自然界の極微の営みが人の耳には聞こえずとも、人智を超えた道理によって営まれ、人の世とは分ちがたく通じ合っていることを見通す科学者の直感をも暗示している。“If we had a keen vision and feeling of all ordinary human life, it would be like hearing the grass grow and the squirrel’s heart beat, and we should die of that roar which lies on the other side of silence.” (MM 20: 216-17) この一節に暗示されるように、19世紀後半の科学の進歩は、人の感覚では捉えきれない微視的な生命世界と人間の心身の営みが相互依存している相を明らかにした。デイヴィス (Davis) によれば、人は肉なる存在として自然の一部であり、その法則に服していることが認識された。ましてや、人間の精神世界も肉体の生理的基盤をもつ以上、自然法則の支配を免れることはできないという (4-5)。この時代認識は、チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82)、トーマス・ハックスリ (Thomas Huxley, 1825-95)、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903)、ライスなどが共有していた人間観であった。

上記『フィーリクス』の引用に見える “vibrations that make human agonies” もまた生理学の眼でみた心身の相互作用の含みをもっている。苦しみという主観的な感情も心臓の鼓動と呼吸の乱れの生理的側面をもつ。そこに生理と心理が相互に働きかけあう心身一如の見方が開けて、「心の科学」(Ibid. 5) の光が小説に入ってきたのだ。“low moans in the night, seen in no writing except that made on the face by the slow months of suppressed anguish

and early morning tears.” 自然には言語が内在しているという認識はエリオットが小説を執筆する当初からもっていた問題意識である。⁴ 上記の語句は、作家が言語を肉体の生理現象と不可分一体のものと捉えていたことを示している。トランサム夫人の心の叫びは人には聞こえなくても、その影響は顔の表情に表れる。心労が年月を経るうちに皺や顔色におのずから出る自然の働きに抗する術はないのである。自然は個人の真実をなにごしかの手段で表現する。すべてを見通す眼が現世にも生きていて、人はその審判を避けることができないのである。作家のまなざしはこの道理を見据えていることが偲ばれる。

上記引用で明らかなのは、行為の主体が一貫してぼかされていることである。「過去の罪が心身の活力を奪い、精神的死を生きる」のは誰か、「いまわしい子ども」とは誰のことか、「血縁の悲劇的末路」とは誰のどういう悲劇なのか、「盗み」とは誰のどういう行為なのか、読者はこれらの謎かけをいぶかしみつつ、そこに主要人物の「罪と罰」の物語が暗示されていることに想像力を掻き立てられる。人知れない「夜中の低いうめき」、「胸に隠した苦悩」とは一体どのようないきさつによるものか。人に尋常ならざる苦しみと悲しみが訪れるとき、読者はその人物に耳目を立てる。カロール (Carroll) は『フィーリクス』のテーマが黙示録を偲ばせる (apocalyptic) と指摘する (201) が、その含みは破局が訪れ、そこから再建の努力が始まるというテーマがあるということであろう。「つかの間の一つの命が、遠いいにしえから命のつながりを宿し、後代に因縁を引き継いでゆく…あの血縁の悲劇的末路」は、親の業が子に報いる浮世の道理を捉えている。視野を大きく取り、長い時の経過がもたらす因縁の連鎖を凝視する作家のヴィジョンを思わせる。「人間の業苦を作る震えおののき」は、「命の潮のとどろきのなかでは微かな囁きにすぎない」という。“the roar of hurrying existence” は、顕微鏡を通してみた細胞内部の液体が流動するさまを想起させる。⁵ 自然界には目には見えない命のエネルギーが循環している。ここには生命活動の根源を見つめるまなざしが感じられる。「人の業苦を作る震えおののき」が「生の大音響にかき消される微かなつぶやきにすぎない」とみる発想には、苦しみを命の本質と捉える含みがある。この文脈では、トランサム夫人の心中の苦しみが暗示されている。人の「か細いつぶやき」にこそ当事者にとっての真実があり、苦を免れない人間にとっての普遍的体験がある。語り手の関心がそこに焦点を当てていることが窺い知れる。

引用の第二段落に見られる詩人たちとは、ウェル

ギリウス (Vergil) の『アエネイス』 (*The Aeneid*, ll. 34-49) とダンテ (Dante) 『神曲』 (*The Divine Comedy*) 「地獄編」 (“The Inferno,” ll. 24-45) を指している。「黄泉の国にあるというあの魔法の悲しみの森」が人間の物語を秘め、木々が血を流したり、折られた枝が悲鳴を挙げたりして、隠された人間の業苦を語るという (富田, 注21, 17-8)。これは古代多神教の樹木崇拜の名残を示している。木と人間が親しく命の交流をし、相互依存していた歴史的事実に由来する。木が人間の悲しみの声を発するという擬人法は、自然宗教の共生・循環思想を連想させる。“the red warm blood is darkly feeding the quivering nerves of a sleepless memory that watches through all dreams.” ここにも人の心身の営みを自然の生命的な営みの延長線上にみる発想がある。「真っ赤に燃える血潮」は、樹液と人の血液循環が同じ生理学のレベルで捉えられていることを暗示している。同じ発想は、組織を流れる血液が命の営みを支えるイメージに窺える。夢に姿を変える無意識の記憶に神経伝達の生理的基盤を認める表現にも、生理学的洞察が見てとれる。木々と人間の共生を直感的に感じとっていた古代多神教の想像力は、生態学を構想した科学的な想像力とは一脈通じあっていることを偲ばせる。これは、“R. W. Mackay’s *The Progress of Intellect*” (1851) に見られる歴史主義的聖書批評の見方の反映である。つまり、異教の自然崇拜感情が生き残って、キリスト教の統合的の神性へと結実した歴史的経緯 (28) をエリオットは知り抜いて、古代神話のシンボリズムを用い、性格描写に歴史的連想の奥行を添えたのである。

II. 伏流する過去の湧き出し

以下の一節は、15年ぶりに息子ハロルドがわが家に戻ってくる場面で、トランサム夫人の心境が描かれたものである。彼は19歳の折に旅立ち、スミルナ (トルコ西部イズミルの旧名) で一旗揚げ、相当な資産を蓄えて帰国の途についたのである。その間、母と息子の心の溝は歳月の経過とともに広がるばかりだった。彼は、帰国の予定を伝える直前の一報で、現地妻をめとり、先立たれながら一粒種がおり、その子連れ帰ることを告白したのだ。老いて廃人同然の夫と精神疾患で身を持ち崩した長男を抱える境遇で、彼女の希望は唯一ハロルドが傾いた家運を再興してくれることにあった。その息子の心中に占める母親としての自分の位置が小さくなってしまいはしないかとおののきを覚えつつ、一縷の希望を託す他はなかったのである。

Three minutes before, she had fancied that, in spite of all changes wrought by fifteen years of separation, she should clasp her son again as she had done at their parting; but in the moment when their eyes met, the sense of strangeness came upon her like a terror. It was not hard to understand that she was agitated, and the son led her across the hall to the sitting-room, closing the door behind them. Then he turned towards her and said, smiling,

“You would not have known me, eh, mother?”

It was perhaps the truth. If she had seen him in a crowd, she might have looked at him without recognition --- not, however, without startled wonder; for though the likeness to herself was no longer striking, the years had overlaid it with another likeness which would have arrested her. Before she answered him, his eyes, with a keen restlessness, as unlike as possible to the lingering gaze of the portrait, had travelled quickly over the room, alighting on her again as she said,

“Everything is changed, Harold. I am an old woman, you see.”

“But straighter and more upright than some of the young ones!” said Harold; inwardly, however, feeling that age had made his mother’s face very anxious and eager. (16-7)

長年の苦勞の只中でも心の支えにしてきた息子は、15年前の初々しい青年とは似ても似つかぬ変化を見せていた。夢が厳しい現実にとって代えられた瞬間である。別れた時と同様に、しっかり息子を抱きとめようとおのれに言い聞かせながら、目が合った瞬間、歳月が埋めがたい溝を作っていたことが感じられた。それは、恐れの子兆であった。“You would not have known me, eh, mother?” ハロルドの一言は、二人の心の隔たりがいかに大きいかを、一瞬にして浮き彫りにした。“for though the likeness to herself was no longer striking, the years had overlaid it with another likeness which would have arrested her.” これは、二人の対面の瞬間に夫人の心を捕えた印象がそのまま言葉になったものである。物語を最初に読む者は、この一文の真意を察

することは困難であろう。“another likeness”の遠回しな表現は、語り手の絶妙な言語感覚が捉えた夫人のおののきを物語っている。一瞬の印象が、夫人にとっては過去のおのれの行為を思い起こさせて、心中に衝撃が走ったのだ。眼前のハロルドに実父ジャーミンの面影をみたのである。簡潔な言葉が当事者の過去から現在に至るいきさつを絵のように浮き上がらせている。夫人が家庭の逆境のなかで、よるべないままにエステート専属弁護士ジャーミンに心を許し、ハロルドを身ごもった事情が読み取れる。読者はこの事情を呑み込んで始めて、夫人の心境を暗示した言葉“not ... without startled wonder”の真意に得心がゆくのである。夫人とジャーミンの犯した罪の因果応報は、物語の展開とともに、伏流水が時折地上に湧き出るように沁みだしている。こうした語りの構造が曖昧な多義性の所以でもある。従って読者は、再読によって現在の人間関係に過去の因果が露頭をここかしこに顕すからくりそのものを味わうことができるのである。これは、漆塗りの技法に譬えられる。言葉の表層の下に何層もの意味あい隠れている。読者は、行きつ戻りつ反芻するうちに、意味の重層性が底に広がっていることに気づかされる。

“his eyes, with a keen restlessness, as unlike as possible to the lingering gaze of the portrait,”「肖像画」が誰をモデルにしたものかはほかされている。これがむしろ、15年前に祖国を発つ直前の青年ハロルドのうぶな夢見心地と、現在の明敏な仕事師の物腰との対比を際立たせている。夫人の場合と同様、過去を切り取った肖像画が現在の人物との対比を浮き彫りにし、歳月が人を変える力の大きさが印象づけられる。「でも、その辺の若い者よりしゃんと背筋が伸びていらっしゃいますよ！」ハロルドは、母親に対して配慮の行き届いた言葉を口にしながら、内心彼女の、何かに憑かれたような不安な面持ちを見逃していない。このやりとりに見られるように、言葉の表層の下に隠れた感情の底流を読者に想像させる作家の技は的確無比である。

この場面の直後に、語り手はトランサム夫人の心境を彼女の視点から語る。

life would have little meaning for her if she were to be gently thrust aside as a harmless elderly woman. And besides, there were secrets which his son must never know. So, by the time Harold came from the library again, the traces of tears were not discernible, except to a careful observer.

(17)

ここでトランサム夫人は、長年築いてきた虚構の基盤がわが息子の強い意志の前に突き崩されかねない予感を感じとったのだ。エステート管理の権限移譲を迫る壮年のバイタリティはいずれ、彼自身の出生の秘密をも嗅ぎつける好奇心となつて、母親のバベルの塔の足許を掘り崩すにちがいない。そうなったら自分の苦労は何のためだったのか。館の相続権を正当な法的相続権者（エスタ）の知らぬ間に詐取する謀議をめぐらしたのも、すべてハロルドに家督を相続させてやりたい親心の一心でやったことなのに。“there were secrets which his son must never know.”トランサム夫人の不安の根源が何に由来しているかを示唆した内的独白である。身分の違う相手との情事は、自分にも世間にも決して認める訳にはいかない行為である。夫人の過去を知り抜いている世話係のデナー（39：315）に対してさえ、あえて言葉にできない事実である。おのれの行為を隠し、真実に背を向けることによって、かりそめの安定を得てきたが、その安定が崩壊の危機に瀕していることを悟ったのである。真実を闇の世界に葬り去ることによって、彼女は心の囚人に成り果て、空疎な権威にしがみつくほかに手立てを失ったのだ。ここに、エリオット後期小説に顕著になってくる意味探究のテーマが認められる。虚構を捨てて、あるがままの自己を直視する勇気をもった時、真の言葉が発見され、生きる意味が会得される。ドロシア・カソーボン物語とグエンドレン・デロンダ物語に流れるヒロインの自己発見のテーマがトランサム夫人にも否定的な形で流れている。

Ⅲ. 価値の形骸化と個人の悲劇

『フィーリクス』1章後半で、トランサム夫人を取り巻くジェントリーの精神風土が鮮やかに捉えられている点描がある。18世紀末から19世紀初頭にイングランド保守主義の薫陶を受け、青春を過ごした彼女は、その伝統の鑄型に従って育てられた。ところが時代の潮は、土地を基盤とする貴族・ジェントリー主導の静的秩序から中産階級主導の物質文明・リベラリズムへと変わり目を迎えつつあった。第一次選挙法改正（1832）の物情騒然とした時代の中で彼女は初老を迎えたのである。彼女の意識の中では、既成の身分序列は疑うべからざるものである。この秩序の宗教的基盤をなしている国教会の教義と儀式も、彼女にとっては自明の理である。娘時代に美貌のミス・リンゴン（夫人の旧姓）は「教養ある家庭教師」にレディとしての嗜みを仕込まれていた。

乗馬、水彩画、品位ある会話術と手紙文の心得は将来貴顕の館の女主たるべき資格のはずであった。

ところが、上流階級の女子教育の鑑を自認する若い彼女にも矛盾の種があったのである。語り手は、ミス・リンゴンの偽らざる人間性を、こう見通している。

however such a stock of ideas may be made to tell in elegant society, and during a few seasons in town, no amount of bloom and beauty can make them a perennial source of interest in things not personal; and the notion that what is true and, in general, good for mankind, is stupid and drug-like, is not a safe theoretic basis in circumstances of temptation and difficulty. (28)

娘時代に身につけた才芸の型が習い性となり、自分を取り巻く現実を直視する想像力としては機能していない。語り手は、狭い精神空間に安住する彼女に皮肉なまなざしを向けている。ありきたりの知識は社交界で若き色香の飾り物にはなっても、継承された伝統は自分を虚心に振り返る知恵としては地に堕ちている。“stupid and drug-like”は、茶目っ気ある娘のやんちゃな気分が時の試練を経た経験則を真摯に受けとめられないことを仄めかしている。いざ試練に直面すると、心は欲に囚われ、「嗜み」はむしろ虚栄心を増長させる。自己を超えた道理の働きに耳を貸して、そこに汲めど尽きせぬ味わい(“a perennial source of interest in things not personal”)を深める感受性がないからである。

トランサム夫人にとっては、身についた礼節の型は心映えとしてはもはや生きていない。

Crosses, mortifications, money-cares, conscious blameworthiness, had changed the aspect of the world for her; there was⁶ anxiety in the morning sunlight; there was unkind triumph or disapproving pity in the glances of greeting neighbours; there was advancing age, and a contracting prospect in the changing seasons as they came and went. (28)

時移ってエステートの権威を背負った夫人は、あらゆる気苦労を嘗めた。相次ぐ訴訟沙汰から家計の内情が逼迫し、他人の財産権を横領するまでのあさま

しい行為に及んだ。弁護士との情事はこの過程で起こったことである。隠し事の多い夫人の心模様は、いつの間にか隣人との触れ合いを失ってゆき、委縮していった。キリストの磔刑を暗示する“crosses”がこの文脈で配置されていることは、物語のテーマの重みを感じさせる。下線部“there was”の反復は、歳月を重ねた結果、夫人の内面風景が移ろい、否定的な感情(網掛け部に示されている)が次第に心を占めるようになっていったことを映し出している。ものを見る見方が変われば世界が変わるというのがエリオットのロマン派的な感受性である。季節の移ろいも朝日のきらめきにも執拗な不安が影法師のようについて回る。これは、自我の不安が世の恵みを掻き消してしまう内的な真実を穿っている。自我の迷いを描く人物群像の中でも、トランサム夫人のそれは、作家の達意の言語感覚によって画期をなす。この延長線上にカソーボンの生き地獄(MM, 29章)があるといつてよい。

これに続く場面で語り手は、夫人の飢え乾いた我執の日々に彩りを添えるものは何かと問う。“Under protracted ill every living creature will find something that makes a comparative ease, and even when life seems woven of pain, will convert the fainter pang into a desire.”(28) 特定人物の内面描写の後に、語り手が一步身を退いてその意味合いを語る手法は初期小説と変わるところがない。ここにエリオットの生命進化観が反映している。試練が続いて苦しみ募るとき、生命は苦痛の度合いが軽いものを欲望に変えてその軽減を図るという。苦しみは自然の本質的な姿であり、これに堪えて、少しでも苦痛を緩和するように生き残りを図ろうと適応するとき、生命は新しい能力を獲得するというのである。進化する生命の創意工夫が人間の内的営みにも生きている。そういう営みの中では善悪も苦楽も絶対的な基準はなく、命の適応能力のみが生かすのである。ここにみられる道徳的価値の相対性は、作家が歴史的聖書批評を自己のものとする過程で学んだものである。ルイスとエリオットは、『種の起源』(The Origin of Species, 1859)と、ハックスリの「命の生理的基盤」(“Physical Basis of Life,” 1868)との対話で生命進化の含みを仔細に吟味するようになった。⁷ これによって、命の営みは道徳的価値にたいして中立であるという認識を深めた。『フィークス』はそういう時期の問題意識を鋭敏に反映していることがわかってくる。

同じ1章にトランサム夫人と、執事ヒックス氏の妻で世話係のデナーの対話がある。リンゴン家に仕え、夫人の興入りに付き添ってきた40年来の腹心で

ある。彼女は、ハロルドの出産にも立ち会い、夫人のすべてを知ったうえで寄り添っているのである。

“I have been full of fears all my life—always seeing something or other hanging over me that I couldn’t bear to happen.”

“Well, madam, put a good face on it, ... there’s a good deal of pleasure in life for you yet.”

“Nonsense! There’s no pleasure for old women, unless they get it out of tormenting other people. What are your pleasures, Denner — besides being a slave to me?”

“O, there’s pleasure in knowing one’s not a fool, ... Why if I’ve only got some orange flowers to candy, I shouldn’t like to die till I see them all right. Then there’s the sunshine now and then; I like that, as the cats do.” (26)

ここには生きざまの好一対が見られる。老境に至っても世の中が厭わしく見える老婦人と、自己を捨てて忠誠に生きてきた老女の諦念が対置されている。一方は老いに伴う容色の衰えを嘆き、他方は老いを受け入れ、身軽になってものを見ている。身軽になって足許を見ると、そこに喜びが満ちているという。この二人の対話には、39章でも再び焦点を当てられているように、作家の明確な意図が働いている。一つには、トランサム夫人の苦しみが何に由来するかを洞察する作家のまなざしが働いている。夫人の内面風景はエリオット自身の内密な問題意識に根差している。気質・体質に起因する繊細さと心配性は、人間メアリアンの宿痼であった。自己執着の淵に沈む人物描写の系譜は、作家が不安に囚われがちな自己のありようを表現によって解き放つ努力の表れと推察される。迷いやすい自己を直視し、生の充足をいかに得るかというテーマは作家の深い体験から発せられている。

トランサム夫人とデナーの対話は、ある意味で作家の内的対話の表白とみることでもできる。これによって、ヒロインの問題を浮き彫りにし、物語の地図にその性格像を位置づける機能を果たしている。彼女の悲劇は空文化した宗教ドグマに安住した結果、真にものを見る感受性が鈍磨しているところにある。光に照らされてあるがままの自己を懺悔する純真さが枯渇しているのである。オレンジの花を砂糖漬けにするような平凡な楽しみもなく、雲間の切れ目から差し込む日光に感動する詩心も不安にかき

消されている。隣人と自然との触れ合いで人の五感満たされ、感情と思考は生き生きと交流する。そういうロマン派的な感受性の枯渇が人生から喜びを奪い、人の内面を荒涼とした風景に変えてしまう。これがトランサム夫人の内的気象なのだ。その意味で夫人の性格像は、作家が心の安息を求めて人生行路を手探りした道筋の一里塚をなしている。この同じ問題意識がMMでドロシアとカソーボンの結婚生活に結晶し、*Daniel Deronda*でグエンドレンの苦悩と救済の物語へと展開してゆく。

IV. 個人の生に生きる歴史の力

エリオットは序章に続いて、物語の歴史的背景としてミッドランドの田舎町トリビー・マグナの時代状況を3章で再び焦点を当てている。そこにイングランドの過去の姿が30数年の時を隔てて振り返られている。これを端的に言えば、土地を基盤とする田園文化から商業・産業活動を基盤とする都市文化への推移と葛藤といえる。この葛藤は宗教生活にも反映している。伝統的権威のシンボルである国教会の支配秩序の下に、ピューリタン革命のマグマが冷え固まった非国教会派が産業都市の片隅にそっと生きながらえていた。チャペルに通う労働者の精神生活は、現世の貧しさを堪え忍ぶ代償として来世に神の王国を待望する宗教的保守主義に支えられていた。そこに労働組合運動の風が忍び寄ってきた。ディセンターが批判勢力として台頭し、国教会の因習的秩序に揺さぶりをかけるようになったのである。階級序列の打破と生活改善を叫ぶ民衆の声に、国教会は昔の寛容さを維持するゆとりをなくしつつあった。その反面教会内部で、民衆の不満を和らげるため、漸進的改革を唱える声も上がりはじめた。伝統的権威を柔構造にして既成秩序の延命を図ろうとしたのである。この背景には福音伝道主義の信仰復活運動があった。トレヴェリアン(Trevelyan)によれば、ジョン・ウエズリー(John Wesley, 1703-91)に淵源をもつこの運動は、因習化した国教会を内部から改革しようとする動機をもっていた。これが教会にとどまらず非国教会派の改革運動にも新たな命を注ぎこみ、社会の各層へ微生物のように広がっていったのである(433-34)。この運動は、キリスト教の民主主義の原点に回帰しようとする保守的な宗教心情に支えられていた。⁸これが労働組合運動に流れる、民主的権利拡大の声と葛藤していた。

エリオットは、少女期から青春期にかけて福音伝道主義の影響の下に自己形成をした。その禁欲的信仰の風は彼女の精神史に遺産として生きていた。「ジャネットの悔悟」(“Janet’s Repentance”,

1858)に見られるように、国教会支持勢力と福音主義者が争う風景は彼女の精神的風景の一部であり続けた。その記憶の最良の人格的表現は『アダム・ビード』(*Adam Bede*, 1859)のダイナ・モリスであり、最悪の表現はMMのバルストロードである。この運動の裏表を、生きた人間の息吹として描ききるほどに知り抜いていた。『フィーリクス』に見られるライアン師の古風な信仰(6:75-80)と、フィーリクスが志す労働者階級の道義復権運動(30:250-51)は、作家の器の広い精神の生命的な部分をなしている。この宗教的感受性が、ハロルドの性格像に見られる計算高い功利主義への皮肉な視線(43:344-45)となって表れている。彼の人間性は、老いの悲哀をかこつ母親への態度に表れている。表面的な慰撫の衣の下に男性支配の固い鎧が見え隠れしている。その冷たい打算と鉄の意志が母親の希望を打ち砕く結果になる。彼の紳士然とした見かけと人格的内実の落差を知り抜いているのが母親であり、彼の求愛を受けるようになったエスタである。彼女は、自分がトランサム・エステートの相続権を持っていることを知るに及んで、そこに招き入れようとするハロルドの依頼に応えたのである。そのエスタが、彼の醸すジェントリー文化の「良識」と審美的洗練に心惹かれながらも、温かみと共感の欠如を直感したのは、母親に対する冷たい仕打ちを垣間見たことによる。こうして彼女は、父親の純一な宗教的帰依とフィーリクスの無骨な霊性と、ジェントリーの暮らしの間で葛藤し、結局フィーリクスを伴侶に選ぶに至る。このように、時代の潮流と人物の価値は有機的に絡み合っており、個々の人物は相互依存関係の地図に組み込まれている。この傾向は『フィーリクス』を境に顕著になっている。

個人の暮らしは大きな時代状況とは無関係ではありえない。自然の生命が環境との関わりの中で長い時間をかけて適応し、生き延びる知恵を身につけるように、個人の生活には共同体の歴史が深く関与している。個人と個人、個人と共同体の相互依存には過去が深く息づいている。語り手は有機的共同体のヴィジョンを語る。

there is no private life which has not been determined by a wider public life, from the time when the primeval milkmaid had to wander with wanderings of her clan, because the cow she milked was one of a herd which had made the pastures bare. ... And the lives we are about to look back upon do not belong to those conservatory

species; they are rooted in the common earth, having to endure all the ordinary chances of past and present weather. (45)

ここには、生命と環境との精妙な相互依存が人間の暮らしにも生きていることを読みとる進化論の発想が暗示されている。太古の乳搾り女が自分の属する氏族とともに遊牧生活をするのは、人と家畜と大地の切っても切れないつながりの中に個人の生が組み込まれているからである。この根本的事実は、近代の物質文明の進展により個人が相対的な独自性を得た現代でも変わらないと語り手はみる。これは文化人類学のまなざしの反映である。“those conservatory species”の含蓄は深い。物質文明の恩恵で人が大地から離れて暮らせると思うのは錯覚なのである。人の心身には記憶を絶する時の営みが隠されている。自然の大きな働きの中で、命は「偶然」に弄ばれつつ、その制約の中で束の間の時間を終えては去ってゆくという。

これはダーウィンが『種の起源』(*The Origin of Species*, 1859)でみせた炯眼と相通じている。

Under nature, the slightest differences of structure or constitution may well turn the nicely balanced scale in the struggle for life, and so be preserved. How fleeting are the wishes and efforts of man! how short his time! and consequently how poor will be his results, compared with those accumulated by Nature during whole geological periods! (112)

自然の悠久の営みの眼でものを見ると、人間は小さく見える。地球が長い時間を掛けてその卓越したバランス感覚を働かせた成果が今この瞬間なのである。⁹ 生物のほんのちょっとした変異も、大きな時の尺度でみれば生き延びるか死滅するかを分ける分岐点となる。地質変動と気象変動の想像もつかない働きが大地の姿と命の形態に結実しているという。これは、人間をみる眼の根本的な転換を迫る契機を孕んでいる。人間の時がいかに束の間で、その努力がいかに微々たるものかを飽かず語るダーウィンの想像力は人間中心主義の文化そのものに揺さぶりをかけている。

V. むすび

『種の起源』が世に出て以来、エリオットはその深い意味あいを熟考するようになった。ルイスと共

有した問題意識と相まって、彼女の小説言語は自然の営みの中の人間という視点を深めていった。もともと歴史感覚の鋭敏な彼女は、人の歴史の奥に地球史の人智を超えた闇が広がっていることに眼を向けるようになったのである。自然に内在する神秘はものの背後にも人間の心にも生きていて、言葉の表現を待っているという見方が後期小説では強まった。人の心にも神秘の闇たる無意識が広がっている。それは記憶の地層の深い部分に隠れている。この闇を手探りし、相互依存の網の目を生きる人間の行為を、動機を探求する観点から描くことが小説の中核的テーマとなったのである。

これに照応するように、心身の闇を照らすサーチライトとしての言語観が語りの構造に根づくようになった。ドーリン (Dolin) によれば、カルヴィニズムの形を変えた遺産がエリオットの中で道徳的因果律と行為の重視となって小説に生かされたという (176)。トランサム夫人描写に見られる自我の迷いを照らす超越者の眼は、作家の中で宗教的人間観と科学的世界観がせめぎあっていることを示している。彼女は、進化論を受容することにより、自然は道徳的価値に中立であるとみる価値の相対性を深く受けとめた。これが道徳的関心の重々しさを和らげ、科学時代の洞察が小説の奥行を深めることになったのである。『フィーリクス』は、宗教と科学の対話という観点からみて、作家の円熟期を画する最初の作品となった。

注

- 1 シャトルワース (Shuttleworth) によれば、ルイスが有機的生命統合体の理論的仮説を立て、エリオットが小説で生理的・心理的存在としての人のダイナミズムを探求したという。George Eliot and Nineteenth-Century Science: The Make-Believe of a Beginning. p. 22.
- 2 カロルは、エリオットが生命 (人生) とその営みを凝視するまなざしに動的なモデルがあるという。このモデルを推進する力は果てしない意味解釈の探求である。この探求プロセスは、アイデアと体験、部分と全体、をより広い統合的地図の中に位置づけるところに働くという。David Carroll. *George Eliot and the Conflict of Interpretation: A Reading of the Novels*. p. 35.
- 3 *Felix Holt, the Radical*. Ed. Fred C. Thomson. 括弧内の数字は章とこの版のページ数を示す。以下、同様。
- 4 *Adam Bede*. Ed. Doreen Roberts. p. 33.
“Nature has her language, and she is not

unveracious; but we don't know all the intricacies of her syntax just yet, and in a hasty reading we may happen to extract the very opposite of her real meaning.”

- 5 トーマス・ハックスリは、イラクサの繊毛を顕微鏡で観察している。細胞の層状原形質は絶えざる流動状況にある。細胞室の一部に収縮が起きると次から次へと伝わってゆき、波の動きのように広がる。これは、小麦畑でそよ風が吹くと穂波がそよぐ光景に似ているという。“On the Physical Basis of Life.” p. 274.
- 6 下線と網掛けは筆者による。
- 7 ビアによれば、エリオットの進化論受容はゆっくりとした困難な過程だった。『種の起源』を出版後ほどなく読んでいるが、その奥深い意味あいには気づいていなかった。それが彼女の道徳観と相容れなかったからである。その含みを熟考し、小説テキストに消化して表現するようになった後も、進化論にたいする皮肉なまなざしは保持していたという。Darwin's Plots. pp. 146-47; 「沈黙の向こう側」の一節は「命の生理的基盤」のパロディ (275) であることに示されるように、エリオットはこのエッセーを精読している。
- 8 カザミアン (Cazamian) は、イングランドでは一つの宗教体制の命脈が尽きると決まって宗教復活運動が起こるパターンがあるという。福音伝道主義運動の勃興もこの伝統に位置づけられるという。Modern England, p. 34-5.
- 9 ビアは、この見方をロマン的物質主義と呼ぶ。自然の悠久の営みの結果として森羅万象を歴史の流れに位置づけるダーウィンの方法にロマン派、特にトーマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) の「自然的超自然主義」(Sartor Resartus, Book III, chap. 8) と相通じる想像力を見たのである。Darwin's Plots, p. 75.

Works Cited

- Beer, Gillian. *Darwin's Plots*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Carlyle, Thomas. *Sartor Resartus*. Ed. Kerry McSweeney and Peter Sabor. Oxford: Oxford UP, 1991. 193-202.
- Carroll, David. *George Eliot and the Conflict of Interpretations: A Reading of the Novels*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Cazamian, Rouis. *Modern England*. Tokyo: Nan' Undo, 1980.
- Darwin, Charles. *The Origin of Species: By Means*

- of Natural Selection or the Preservation of Favored Races in the Struggle for Life*. New York: Modern Library, 1993.
- Dante, Alighieri. *The Divine Comedy*. New York: New American Library, 2003.
- Davis, Michael. *George Eliot and Nineteenth-Century Psychology: Exploring the Unmapped Country*. London: Ashgate, 2006.
- Dolin, Tim. *George Eliot*. Oxford: Oxford UP, 2005.
- Eliot, George. "R. W. Mackay's *The Progress of Intellect*." *George Eliot Selected Critical Writings*. Ed. Rosemary Ashton. Oxford: Oxford UP, 1992. 18-36.
- . *Scenes of Clerical Life*. Ed. Thomas A Noble. Oxford: Clarendon Press, 1985.
- . *Adam Bede*. Ed. Doreen Roberts. Ware: Wordsworth Edition, 2003.
- . *Middlemarch*. Ed. and introd. A. S. Byatt. New York: Oxford UP, 1999.
- . *Daniel Deronda*. Ed. and introd. Graham Handley. Oxford: Clarendon Press, 1984.
- Huxley, Thomas. "On the Physical Basis of Life." *Victorian Prose and Poetry*. Eds. Lionel Trilling and Harold Bloom. New York: Oxford UP, 1973.
- Shuttleworth, Sally. *George Eliot and Nineteenth-Century Science: The Make-Believe of a Beginning*. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Trevelyan, G. M. *English Social History: A Survey of Six Centuries from Chaucer to Queen Victoria*. London: Longman, 1978.
- Vergil. *The Aeneid*. Trans. Sarah Ruden. New Haven: Yale UP, 2008.
- 富田成子訳 『急進主義者フィークス・ホルト』 彩流社, 2011年。